麥名稱

古事類苑

植物部十三

草二

〔倭名類聚抄十七〕麥稻穀附　陶隱居本草注曰、麥莫革反、和名牟岐。今按大小麥之總名也、故別擧之、五穀之長也、

〔類聚名義抄一〕麥音脉、ムギ、麥麥正

〔伊呂波字類抄无殖物附殖物具〕麥ムギ俗作麦　稻同稻處種麥也

〔下學集下草木〕麥ムギ玉篇云、俗作麥、

〔易林本節用集波草木〕麥バク

〔段注說文解字五下〕麥芒穀有芒束之穀也、稻亦有芒、不偁芒穀者、麥以周初二麥一鏟箸也、鄭注大誓引禮說曰、武王赤烏芒穀、應許本禮說、秋穜厚薶、故謂之麥、薶麥壓韵、夏小正九月樹麥、月令仲秋之月、乃勸種麥、毋或失時、麥以秋種、尚書大傳淮南子說苑皆曰、虛昏中、可以種麥、漢書武帝紀謂之宿麥、麥、金也、金王而生、火王而死、程氏瑤田曰、素問云、升明之紀、其類火、其藏心、其穀麥、鄭注月令云、麥實有孚甲、屬木、許以時、鄭以形、而素問以功性、故不同耳、从來、有穗者也、也字今補、有穗猶有芒也、有芒故从來、來象芒束也、从夂其行來之狀、莫切、古音在一部、凡麥之屬皆从麥、麰來麰逗麥也見毛傳、从麥牟聲、莫浮切、三部、

〔日本釋名下穀〕麥　他の穀は一度からを去てよし、麥はからを去て後、度々皮をつきむきて後、食とする故にむきと云、

〔東雅十三穀蔬〕麥ムギ　舊事紀には、保食神の臍尻に麥豆を生じ、陰下に小豆麥を生せりと見え、古事記には、大宜津比賣神の陰に、麥を生せしと見えたり、ムギといふは、義詳ならず、古語にムと云ひ